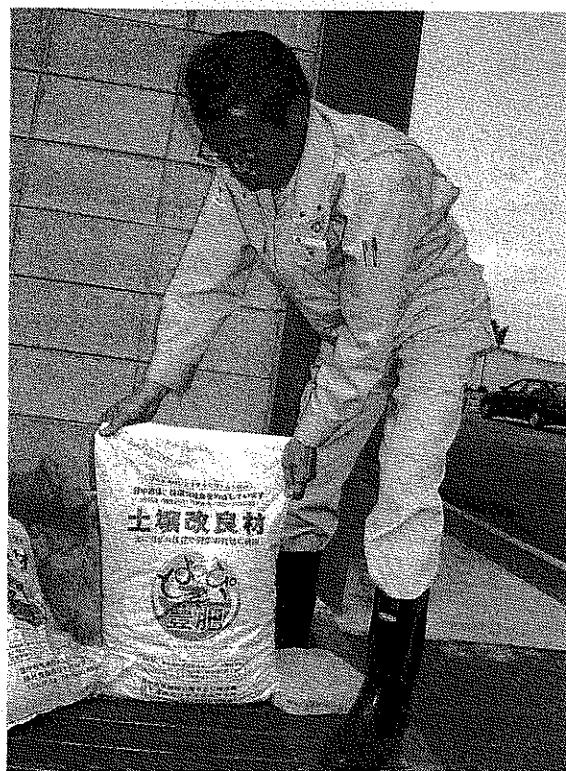


生ごみ、剪定枝を土改材に

# 広がるリサイクル

豊中市

今年度は100トン



大阪府豊中市の市民グループが始めた、生ごみリサイクル活動が広がっている。同市内の小中学校の給食残さと街路樹の剪定（せんてい）枝（くず）でつくった土壤改良材「とよっぴー」は、市役所の食べ残しの再資源化から始まつた。草の根の活動が市を巻き込み、2004年度は、前年度に比べて20%多い100トンの製造・販売を予定している。

## 市民農園利用者に人気

「最初は堆肥（たいひ）一模（もく）にならうとは思わなかつた」と、NPO法人の認可を受けた「花

豊利活動法人（NPO法

人）の認可を受けた「花

柳澤俊治さんは話す。

1999年に、市民主導で市役所の食堂の調理

かすと食べ残しを、堆肥化する試験をしたのが始

まり。2000年には、同市の給食センターから

う出る生ごみと街路樹などの剪定枝を混ぜて発

酵（け）熟成させる現行の方

法になつた。

99年から3年間の試験結果を同市に提案し、02年

の生ごみ堆肥化施設（「緑と食品のリサイクル

プラザ」）の建設につなげた。

同プラザでの毎月2回の販売には、市民の行列

ができる。4月は、1日で100人以上が集まつた。

と緑のネットワーク」の

柳澤俊治さんは話す。

1999年に、市民主

婦や、市民農園の利用者

らが購入している。今年

から、協力農家の水田へ

の投入試験を始めたなど

生産者の利用拡大も進め

る。

10haの農地に「とよっぴー」を投入している柳

澤さんは「地場産野菜を

給食用に出荷して、地産地消と資源循環を実現す

るのが目的。実現のため、活動を続けていきた

い」と話す。生産者からは「土が軟らかくなつたな

どの声も上がっている。

同法人代表の高島邦子

さんは「資源循環の確立

など、目に見えない価値

を多く生み出している」

と、今後は食育や地産地

消の推進に取り組み、活動の輪を広げたいと前向きだ。